

ホトトギス

五月号

昭和二十一年

五月号

日本植物学雑誌



俳句随想〔四百十九〕

汀子

虚子記念文学館で、平成二十九年度の虚子生誕祭が開催された。今年はこの会も第十回を迎えることが出来た。手作りの親しみ深い会にして、虚子の目指して来た花鳥諷詠の心を大勢の方々知って頂く会にしたいと、関係の人々の総意で続けて来た会である。未来の俳人の育成のために、募集句も青少年の部を設け、子供達に道を開いた。大勢の青少年や幼い子供、の眩きも俳句になった。立派な心を持って素晴らしい作品の数が選ばれて、さっそうと受賞された。この日は誰もが俳句に親しみ、自然を讚美する心になったのではないかと思う。野球の服装をして、野球の俳句を作つて入賞した少年は、この後野球の試合に行くと言っていた。全国各地から都合の許す限りの出席を頂き盛会であったことを感謝している。私が昔、二十年間、芦屋の山手にある甲南高校中学の男子校に俳句の特活教育活動を毎週指導に通った。その時の生徒の一人がお父さんになって、お子さんの入賞について来られたことを知った。「先生、僕特活で先生に俳句を教えていただきました」と笑顔で挨拶された。「まあー」と一瞬言葉を失ったが、そこには中学生だった少年のこやかな顔があった。奥様と入賞した子供もここにこしながら帰って行った。昔、子育てをしながら、夫にも薦められ、二十年の歳月を若者たちと俳句を語り合った日々が、今、このような形で帰って来ていることに感慨を覚え、早世した夫と一生懸命生きてきた若い日々を懐かしく思い返している。

旬日記 汀子

平成二十八年五月一日 下萌句会

咲くものの減り移りゆく庭若葉
海 近き山 近き街 夏 霞
仕事の手止め日々の早さよ旅五月
巡り来る日々の早さよ旅五月
五月二日 ロイヤル吟行会

惜春の情自ら琵琶湖畔
惜春の虚子の曾遊地琵琶湖畔
近江富士 残し湖畔の夏霞
五月四日 祝「柿」七十周年

嵐抜け行ききて薫風とどまりぬ
今日の祝ぎ未来につなぐ薫風にて
今日を祝ぐ初夏の青空頂きて
五月五日 悼 五十嵐哲也様

夏潮を共に越え来し日のことを
五月七日 四国ホトトギス同人会
松蟬に鳴き包まれてぬし旅路
阿波に来て夏めく旅と思ひけり

誰彼を偲ぶ心に阿波の夏
緑より緑へカーブ又カーブ
追憶の心に阿波の初夏を訪ふ
五月八日 四国ホトトギス俳句大会

薔薇園に静かな闘志ありしかな
モラエスも聞きし眉山の老鸞に
五月十日 大阪倶楽部
人 悼み 若葉の風に心置く

薫風や馴染みて軽き旅靴
もう会へぬ友を偲びて風五月
五月十日 綿業倶楽部
隣席の空きし淋しさ朴の花

なつかしき思ひ出葉り朴の花
朴の花計報聞きつつ旅に出る
五月十二日 清交社

筍の太さの伸びてゆく早さ
新緑の色を深めて旅つづく
カーテンを開けて加はる初夏の街
俯瞰の明るき朝の目覚めかな
旅予定つづいてほしき新樹晴
五月十三日 工業倶楽部

蚕豆をつまみ慣ひの祭来る
京の街混むが慣ひの祭来る
五月十四日 北海道ホトトギス同人会
降り立ちし五月の蝦夷の風纏ひ

世界一とはこの緑なる牧場
着陸す五月の雪の山見つつ
忽ちに蝦夷のみどりに吞まれたる
五月十四日 北海道ホトトギス俳句大会前日句会

この広き大地五月の風を生む
快晴の旅路五月の蝦夷なりし
五月十五日 北海道ホトトギス俳句大会
若き日々甦りたる初夏の旅

偲ぶ人多し五月の風の中
なつかしき大地よ風よ蝦夷の初夏
五月十七日 有恒俳句会
風五月北の大地に着陸す

更衣風にも馴染み行きにけり
軽暖の歩みとなりし旅帰り
散るものの無かりしよりの葉桜に
五月十七日 無名会

今蝦夷は若葉明りに包まれて
若葉風北の大地を吹き抜ける
若葉冷ほどけてゆける家居かな
根切虫には負けられぬ庭仕事

語らばや若葉の旅路より帰り
五月十八日 夏潮句会
鈴蘭を持ちて乗込む帰路の航
離陸する風より茅花流しかな

水音を消して風音庭五月

筍の伸びる勢ひを見て家居
若楓より吹く風の中に居り
山法師咲けば旅路の待つてをり
木星も火星も見えさやぎて若楓
人悼みをればさやぎて若楓
五月二十六日 きざらぎ会

空の旅として卯浪越え来し思ひ
印象を更に加へて初夏らしく
旅多き日々となりつつ夏めける
古茶淹れて仕事の意欲湧き立たす
健康に勝るものなし午後の古茶
五月二十六日 アネモネ句会

薔薇の香を抱けば幸せ抱く如く
薔薇よりも美しく癒え来られたる
稿債も家居の一つ薔薇の卓
薔薇の香に背中を向けし男かな
夕霧の灯見て帰路となる涼しさよ
薔薇の香にふる日本茶の欲しくなる
五月二十七日 時雨句会

朝の雨上り薄暑の午後となる
軽暖の旅路を心通はせて
滞在の長くなりたる薄暑かな
松落葉掃きたる跡をとどめずに
忽ちに三社祭の人となる
五月二十八日 句会と講演の会

旅疲れ癒やす清水に手をひたし
五月三十一日 稽古会
善哉活けて古き仲間を待つことも
いつまでも古き仲間は若し老涼し

来年に向かふ心を立つる夏
友病めばわが齢思ふ五月尽
心入れ替へて朝涼身に纏ふ
若き日に戻る涼しき心かな
古茶淹れて古き仲間をもてなさん
血糖値今日だけは別会涼し

火星見るための露台の待つ家路

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十八年五月一日 野分会吾屋例会

糸瓜苗仰臥の子規の視線かな
一笛に祭の町となりゆけり
神輿昇く三児の母でありにけり
祭前町膨らんでゆきにけり

五月一日 青嵐会吾屋例会

股覗きして松蟬を眼下にす
松蟬に天橋立伸び縮み
五月七、八日 四国ホトトギス同人会、大会

卯浪寄す水切り石を弾ませて
風に香を放ちつつ落つ桐の花
日差得て松蟬の声新しく
血天井靈気涼しく放ちをり
黒猫に青大将のたぢろぎぬ

五月九日 祝サンタリア店長復帰

これよりは真紅の薔薇の輝きに
帰り来し友に乾杯灯涼し

五月九日 朝日カルチャー若草句会

若楓都心にもある原始林
一匹の守宮神とも仏とも
若楓風を素通りさせてをり
守宮這ふ明治の玻璃戸歪めつつ
青き香を拵げ豆飯炊き上がる
好き嫌ひとは豆飯の香りにも

五月十二日 土筆会

又一つ葉減りたる葉の日
夏霞揺れて都心のビル揺るる
名園に代田の水の微笑めり
不老不死夢見し人や葉の日

五月十四、十五旧北海道ホトトギス同人会、大会

旅薄暑阿波に別れて蝦夷に会ひ
更衣とは蝦夷の旅終へてより
夏霞抜けて地球の丸さ見ゆ
江戸と蝦夷繋ぐ卯月の空の道
空路来て陸路を帰る旅薄暑
卯浪寄す東京湾を俯瞰して
齟齬も又薄暑の旅の楽しみに
滞在を一日延ばして蝦夷涼し

代掻いて蝦夷の大地を覚ましゆく
鈴蘭の香に演壇の改る

五月十七日 北國文芸選者吟

田植待つ蝦夷の大地の果てしなく
五月十八日 蕉心会

日を浴びて葉桜色を尽しけり
遊船の水を歪めてすれ違ふ
更衣して下町に紛れゆく
離れては群れ離れては群れ金魚
蝦夷の冷えより帰り来て江戸薄暑
不運とは続くものなり夏霞

五月十九日 登高会

常宿の嫡男育ち武具飾る
篠の子の穂先は風の寄りたがる
葉の日葉を友と言へる人

百年の時を戻して武具飾る

五月二十一日 祝「紫苑」壹千百号

百年へ足音高く風薫る

五月二十二日 青嵐会東京例会

朝の間の薄暑に猫の見え隠れ
日表に都心の茂色尽し
大寺の屋根薫風に反り返る
薫風に磨かれてゆく電波塔
十葉の白より園の明け初むる

五月二十二日 野分会東京例会

糸瓜苗二年二組の札立てて
神輿昇くより禁酒解く漢かな
五月二十四日 若水句会

琵琶の音の心耳に聞こゆ蟬丸忌
朴の花丹波に先祖辿りもし
蟬丸忌淡海を更に近づけて
三井の鐘現に聴きて蟬丸忌
色と香が山気鎮めて朴咲けり

五月二十五日 目黒学園句会

花水木都心の音を吸ひ込めり
宵宮の灯りてよりの佳境かな
花水木れんぐわ造りの多き街

五月二十八日 ホトトギス社句会

祭髪結うて恋人未満かな
ビル街の点描として花水木
清水汲む聖母の奇跡信じつつ
山清水湧きて大海への一步
漫談も交へ涼しき講話かな

雑詠 廣太郎 選

あらたまの年ハイにしてシャイにして
 去年今年昨日と今日が糺り合ひ
 大台に乗せたる歳にお年玉
 小原流てふ霜枯を活けにけり
 相部屋の素顔は本音避寒宿
 おしのぎと云ひ豆菓子に春を待つ
 なまはげや闇引きずつて歩くなり
 なまはげの勝手知つたる家の内
 熊を彫る男熊めく厚司着て
 快晴の冬至の富岳称へけり
 冬ぬくき旅や北国まつ白と
 虎落笛雪の近づく前触れか
 迷ひ猫家族に迎へ冬ぬくし
 迷ひ猫過去を語らず日向ぼこ
 猫の毛の日にふつくらと日向ぼこ
 穴ひとつ開いて気安き障子の間
 正論を語り水洩しきりなる
 ひと時雨ふた時雨湖眠りゆく

神 後藤比奈夫

同

同

吹田 生澤瑛子

同

東京 田丸千種

同

長岡 安原 葉

同

東京 岩村恵子

同

神 戸 山田佳乃

同

同

同

同

同

同

今日よりは初学の心枇杷の花
 湯豆腐の踊りて京の奥座敷
 ラブレターともクリスマスカードとも
 初夢のためにフランス製まくら
 北国の氷柱の長さ夜の長さ
 北斗より光のしづく聖夜ミサ
 大琵琶に偲ぶ誰彼時雨虹
 比叡の影より湖心へと鴨の陣
 重さうに長き助走の鴨翔てり
 極月といふにもありぬ暇潰
 寒林や弱りては思惟裏返る
 寒紅や彼女の愚痴の止らない
 朝桜 中千本も薬勝ちに
 花光りつゝ、天空のひとかけら
 風止まり時の止まりて夜の桜
 冬蝶の地震の石にもすがりぬる
 落葉してわれも市塵にまぎれけり
 行年のもんどり打つて奔る水
 外来の魚も草も冬ざるる
 水鳥や運河縦横なるお江戸
 雨の音激しくなりぬ玉子酒
 雪富士の夜明け八百万の神と
 凍星や土天海冥ひきよせて
 寒に入る切つ掛地球に聞いてをり

同 和田華凜

同

同

同 藤井啓子

同

同

同 千原叡子

同

同

香川 湯川 雅

同

同 今井肖子

同

同 岩岡中正

同

同 河野美奇

同

同 橋本くに彦

同

同

同

同

同

雑詠句評(四月号より)

仁義・霜衣・しげ人
公次・雅・くに彦
純也・佳乃・一步
さい雪・廣太郎

おでん屋へ一度は通り過ぎし歩が

金沢 藤浦昭代

家路を急いでいた途中であろう。余りにも寒いので、おでん屋へ寄つて少し温まつてから帰ろうと思つた。しかし一方で、家へ待つていた家族を思うと、一刻も早く帰りたい気持ちも募つていた。おでん屋へ入ろうか入るまいかの心の相剋が生まれていたのである。結局、一度はおでん屋の前を通り過ぎたが、逆戻りしておでん屋へ入つてしまつたというのである。心の相剋が、面白く内包されている。(仁義)

会社の帰りを想像するが、寒い中、おでん屋の前を、最初は何気なく通り過ぎるのだが、ふと意識してか無意識のうちにか歩は止まり、やはりおでん屋に寄ろうかどうかの思案が始まる。果たしてこの足は再びおでん屋へ戻るのだろうか。絶妙の言い回しで季題の庶民的な姿を見事に捉えている。(廣太郎)

ところどころ渴筆雨の大文字

神戸 後藤比奈夫

八月十六日の京都は雨になった。松の割木に火がつきにくく、「大」の字が点々と途切れている。

それを「渴筆」と表現されたこと自体も美しい。しかし、渴筆がわざと字をかすれさせる技であることを思うと、「雨の大文字」も天の意思なのだという達観なのかもしれない。そのことがまた美しく感じられる。「ところどころ」という静かな字余りがなおさらに美しい。(霜衣)

平成二十八年の大文字は雨で、結構これは珍しい事であるそうだ。やはり火を燃やすので、雨が降ると色々不自由がある事は想像に難くない。聞いた話ではこの時の雨はかなり酷かったという事で、主催者も大変な御苦労であつただろう。そんな様子をすっきりと叙しているところが魅力である。(展太郎)〈以下略〉

天地有情

星月夜三瓶の夜を欺かず 東京 稲畑廣太郎
 時惜み命惜みて秋の蟬 同
 友情は降り積もるもの落葉道 熊本 岩岡中正
 相聞のごとくに天地初茜 同
 除夜の鐘雪の遠音となりにけり 神戸 三村純也
 大晦日らしき寒さとなりにけり 同
 分宿へタクシー待たせある寒さ 長岡 安原 葉
 快晴の師走空路に不安なし 同
 書初に信玄公の墨を足す 神戸 和田華凜
 吉兆をつけて生るる笹の顔 同
 いささかの煮物などして年用意 東京 今井千鶴子
 何ひとつ変はることなく年を越す 同
 これよりは日脚伸ぶこと楽しみに 龍ヶ崎 今橋眞理子
 塞ぎたる北窓いつか忘らるる 同
 虎落笛 夜の帳を貫ける 東京 山田閨子
 もう開き直るしかなく十二月 同
 嵐山残る紅葉となりにけり 神戸 後藤比奈夫
 落花見る如く見てぬし散紅葉 同

江戸子選

冬めけることにも老の覚束な 相模原 木村享史
 散ることのなきかに極め冬紅葉 同
 晴々と花に別れを告げにけり 東京 今井肖子
 蝶ふたつ心もとなき大地より 同
 森深く来たる思ひの庭落葉 宝塚 水田むつみ
 大冬木風の遊び場なくなりし 同
 近道のつもりが迷ひ十二月 東京 河野美奇
 弟子思ひなる文出で来漱石忌 同
 僧老を羨しとも見て小六月 神戸 千原叡子
 露けしや三笠宮の一世紀 同
 吾が影を掃き寄せもして落葉搔 熱海 嶋田一步
 地に形崩さず銀杏落葉して 同
 枯野原大きな声の人が来る 神戸 浜崎素粒子
 またここに来たしと思ふ石路の花 同
 師を秋を惜みて集ふ句座なりし 千葉 大木さつき
 菊月の師の忌日和となりにけり 同
 江戸の世の小判は知らず小判草 福山 竹下陶子
 一水を銀河としたる蛭かな 同

坂の町 稲畑汀子

今年最後の旅になる九州ホトギス俳句大会は長崎であった。早々と往復の航空券を送って頂くと、今年もいよいよ終るといいう実感がこみ上げてくる。二十数年前だったか、島原へお伺いしたときの事が思い出される。島原への車のラジオのニュースが、普賢岳の噴火を告げていた。その近くを通過していた我々は思わず辺りを探すように目を配ったことを思い出す。九州の俳人金子三郎さんはその時、現役のパイロットをしておられ、噴火の煙の届く上空を飛んでいたと言われて驚いた。災害の多い日本列島、今年には熊本の地震や、阿蘇山の噴火などで被災された方も多く、その方々とお目に掛かれるだろうかと思いつつ旅の用意をしていた。

着陸した長崎空港は快晴であった。案内して下さる吉岡乱水さんはタクシーの助手席に、廣太郎と私は後部座席に乗り話が弾んだ。

長崎は坂の街である。

「乱水さん！ここに住む方々は車がないと生活出来ませんね！」

最近私が運転することに反対している息子の前で言った。

「はい、ここに住む方々は健脚です」

「本当！坂ばかりですね」

廣太郎は黙っている。

昭和二十年、広島へ原爆が投下された三日後、長崎にも原爆が投下された。中心辺りにあった浦上天主堂も破壊された。まだ復旧されていない時に、長崎のホトギス俳人の森冬比古さんに案内して頂いたが、それは父について初めて俳句の旅で長崎を訪れた娘時代のことであった。

今回、吟行のコースの初めに訪ねた永井隆博士の二畳一間の家と記念館も昔の面影を残していて、戦後七十年の歳月を語る畳の傷みがあるが、美しいマリア様の像と白百合の花が心に残った。

浦上天主堂は立派に再建されていた。その一隅に、原爆に遭った残骸の大きな石が残されていたり、平和公園では、テレビのニュースで見たことのある、手を差し伸べた男性の像が、想像していたよりも大きく、迫力があるのに驚いた。

「先生、お着きになったのですね」

誰彼の声が飛んでくる。

「え？東京からいらしたの？」

「あなたのお嬢さんは九州に嫁いでいらっしやるのね」

関西に住む会田仁子さんに気がついて、声をかける。

「先生、お茶をどうぞ！」

金子三郎さんが紙コップのお茶を手渡して下さる。

「有難うございます」

喉が乾いていることに気がついた。

多くの方々が近づいて挨拶して下さる。そこを離れて会場のホテルに向かったが、坂ばかりの街は迷路のようで、ようやく山の上のホテルに着いた。

昔も泊った筈のこのホテルは、その後建て増しをしたので、まるで迷路である。ロビーは八階、食堂は十階、特別休憩室は8・15室と、狭いドアを抜けて新館、旧館。エレベーターは新館、又は旧館、八階のロビーは美しい長崎の街が俯瞰出来る。

「この景色、前に来たとき見たことがあるわ」

思わずひとり言を呟いた。

あれは何年前の九州ホトトギス大会のときであったか、長崎のこのホテルで、今宵花火が揚がるので、ここから見ると誘われた時のことであった。

「え？美しい街をすっぽり包むような硝子に遮られて、街の音はさっぱり聞こえないけれど、花火は始まっているのかしら？」

「はい、始まっていますよ。ほら、今、花火が揚がりましたよ」

「あ！あの小さい丸い光ですか？」

「そうです、そうです」

「豆のようで、いささか迫力に欠けますね」

「はははは」

しばらく眺めていた小さい花火を懐かしく思い返していた。

「さあ、前日句会の締切時間が迫っています。会場へどうぞ」
会場では風邪を引いている人が多いのか、マスクをしている人と何度もすれ違った。

